

L・W・メーソンの再来日計画とアメリカン・ ボード日本ミッション

安 田 寛

I. 発 端

文部省が最初に雇った外国人音楽教師、ルーサー・ホワイティング・メーソン (Luther Whiting Mason 1816-1896) は明治十三年に来日し、明治十五年に帰国するまでのわずかの間に、教材の作成、オルガン、ピアノ、楽譜、図書などの備品の整備から指導法の確立、教師の養成に至るまで文部省の唱歌教育体系のほとんど全ての分野にわたって基礎を確立した。彼の画期的業績の背後にはどのような好条件があったのだろうか。

明治二九年、彼がメイン州の故郷で七六歳の生涯を閉じたとき伊沢修二は弔辞を発表し、そこで、「君が我国楽に尽さんとするの志如何に深かりしかは、此道の為め宣教師の群に入らんとまで決心せしを見てしるべし」と述べた。メーソンに、宣教師として再来日する計画があったらしい。しかし、このような事実は本当にあったのだろうか。いったん文部省のお雇い教師として成功したメーソンが、キリスト教宣教師として日本に派遣されるだろうか。伊沢が根拠にしているのは、弔辞に引用されている明治十七年十二月五日のメーソンからの手紙で、そこでメーソンは「然

迂生は此事業に向て貴国政府の補助を仰ぐことは断念致候へども貴下の親友なる米国伝道師の助けを得て共に此目的を實行せんことを望み居候⁽²⁾と打ち明けている。さらに彼は「迂生が貴国へ再航の事は確實にして大概一年以内には可罷越考に御座候⁽³⁾」と自信を見せている。彼が一年以内に宣教師として日本へ再航した事実はない。伊沢の手前、メーソンは單なる思いつきを言ったのか。それとも宣教師として再来日する計画は実行される可能性があつたのだろうか。

組合派の信者であつたメーソン⁽⁴⁾は、組合派の宣教師派遣団体、アメリカン・ボードの日本ミッションと連携して仕事をした。これからすると、メーソンが宣教師として再来日するつもりなら、アメリカン・ボード日本ミッションの中心人物に接触するに違いない。

明治十八年八月九日の新島の八重宛書簡に、氣狂いじみた老音楽教師が登場する。新島は予期せぬ老音楽教師のはなはだ迷惑な訪問に悩まされている。新島に心底毛嫌いされた老音楽教師、それが、メーソンであつた。再来日の目的と意義とを「青々としたる猫のごとき眼を尚青々ときらめかし、ニヤニヤと笑いかけ」、アメリカン・ボード諮問委員会議長のA・ハーディへの紹介を新島に懇願するメーソンに何があつたのか。

このテーマについて最初に発表したのは、函館のセミナー⁽⁵⁾で、その折には未解決のまま放棄せざるを得なかつた疑問点は、その後、同志社大学人文科学研究所第二研究A班のメンバー、特に、若山晴子氏、吉田亮氏、本井康博氏のご協力によつて解決する事が出来た。さらにその成果を上記研究会で発表させていただく機会にも恵まれた。当論文はその発表原稿を推敲加筆したものである。

II. メーソン賜暇帰国問題

カーチスとメーソン

アメリカン・ボード書記、クラーク (Nathaniel George Clark) がカーチスに出した一八八三年十月二十七日の書簡に、文部省を解雇されたメーソンの再来日問題がはじめて登場する。クラークは、メーソンに宣教師としての来日計画があることを伝え、宗教音楽に多大の貢献が出来ると考えているメーソンの計画をどう思うか、日本ミッションの宣教師たちは賛成するだろうか、と問い合わせている。

W・W・カーチス (William Willis Curtis 1845-1913) は明治十年に來日し、明治十六年に一時帰国するまで大阪で活躍した。⁹ デリア夫人 (Delia Eliza Harris Curtis 1836-1880) は、家庭では夫とピアノを楽しみ、梅花女学校で音楽を教えた。

クラークが最初にカーチスに相談したのは、彼がその時分たまたま帰国中であつたからと考えることもできるが、「君の知人メーソン」¹⁰ という書き出しからすると、メーソンの人物と日本での業績とをカーチスがよく知っていたからに違いない。メーソンは文部省の唱歌教育体系を作り上げる仕事を、関西の組合派の宣教師と連携して行っていたようである。メーソンは組合派の信者であつた関係で、おそらく組合派の宣教師と交際があり、特にカーチスとは、新しい曲集の編纂について親しく交際した仲であつたらしい。メーソンが小学唱歌集を編纂していたとき、カーチスもまた讚美歌集を編纂していた。小学唱歌集初編と「讚美歌并楽譜」とを収録された曲によって比較すると、両曲集の間には影響関係が認められる。¹¹

アメリカン・ボードが伝道活動の拠点にした京都と大阪はメーソンが来日する前から洋楽の先進地域だった。京都では同志社女学校と同志社、大阪では梅花女学校が中心となって組合派の音楽教育が發展していた。梅花女学校があった大阪では讃美歌教育とオルガン教育は明治七年には始まっていた。¹² 組合派の音楽教育がその後順調に發展したことは、明治二十二年頃に、「組合教会の学校は歌がすばらしい。京都、神戸、大阪にそれぞれ一人の音楽教師をもっている。時流に遅れたら我々は生徒を失うのだ」とアメリカ聖公会の機関誌 *The Spirit of Missions* に掲載された手紙でウイリアムソンが競争心をむき出しにしていることから分かる。

来日した年の冬に、メーソンは京都府を訪問している。京都育学校の記録は彼が明治十四年一月三日に訪問したことを伝えている。¹⁴ この年の夏にカーチスと旅行中だったタルカット宣教師によれば、彼女は日光でメーソンとしばしば会っていた。年末には編纂が終わったばかりの教材を携えて再び京阪神を訪ねる計画であったが、メーソンは自ら中止している。メーソンは音楽取調掛での唱歌教育教材の作成の仕事を進めるにあたって、関西の宣教師の仕事を意識し、連携を謀っていた。メーソンの連携の中心にカーチスがいた。メーソンの派遣問題について、そのカーチスにクラークは、まず意見をもとめたのであった。

メーソン解雇の理由

クラークが相談したもう一人はジェンクス (D. C. Jencks) であった。¹⁵ 神戸にいた彼は、税関の仕事を中心に組合派の日本ミッションの事務を一手に引き受けていた。クラークはメーソンが解雇された理由を教員数の縮小のため、と説明している。¹⁶ メーソンの採用を検討していたボードにとって、メーソンがなぜ文部省を解雇されたのか、関心を持たざるをえなかったであろう。十月三十一日付のクラークへの返事¹⁷の中で、カーチスは、「変更（交代、入れ替え）

は日本政府の間違いである」⁽¹⁸⁾と解雇について、日本政府に非があったと主張した。

メーソンの解雇は、これまでに文部省財政窮乏説の他、メーソン・伊沢不仲説、メーソン能力不足説など、あれこれ憶測を生んできた。⁽²⁰⁾ 契約の経緯を追ってみると、明治十五年三月で切れる契約を延長するため、十四年九月二十九日付で、メーソンの「雇継之件伺」が提出された。十月二十八日に三条実美の「伺ノ趣聞届候事」という回答を得て契約は十六年三月まで一年間延長された。厳しい財政事情を押しての延長にもかかわらず、十五年七月になってメーソンは、突然、七、八カ月の長期賜暇を願ひ出る。契約延長後、彼が働いたのはわずか四、五カ月に過ぎない。これで、翌年さらに契約の延長を希望するのは虫が良すぎるし、日本政府が雇継を拒否したのは当然であった、と言わざるをえない。

意外と豊富な関連資料を読めば、メーソンの解雇は、お雇い外国人教師のごくありふれた整理でしかない。解雇と言っても、一度延長された契約の満期後に再契約をしなかっただけである。

ところで、伊沢は、明治十五年一月になってメーソンの契約継続のために上申書を書いた。⁽²¹⁾ この日付は、奇妙である。もしも、十四年十月二十八日の三条実美の「伺ノ趣聞届候事」という回答によって、メーソンの雇継契約が成立したのなら、⁽²²⁾ それよりも後になって伊沢がメーソンの雇継のための上申書を書くことなどありえない。もしも、伊沢の上申書の日付が正しければ、契約は実際には延長されなかった、と考えざるをえない。一端認可されたものの、契約実現には至らなかったのではないだろうか。

上沼説⁽²³⁾によれば、賜暇休暇という形で一年間契約を更新する妥協がなかったらしい。メーソンを解雇したい文部省とメーソンの契約の継続を主張する伊沢との間で折り合いがつかず、結局、賜暇休暇という形で両者の妥協がなりたつたと考えると、なぜ、メーソンは更新を無駄にするほどの長期休暇を願ひ出るという異常な行動にでたのか、なぜ、

賜暇休暇帰国であるのに、あれほどの盛大な送別演奏会が催されたのか、他の説よりすっきり説明できる。また、メーソン・伊沢不仲説、メーソン能力不足説では、メーソンを解雇したのは、伊沢の意思であったことになるが、上沼説では、メーソン解雇はあくまで文部省あるいは日本政府の意思であったことになる。ここで、伊沢自身による次の説明が思い出される。「唯余と君との公私の間の關係如何なりしかは人の知らざる所なれば、却て疑を後世に遺さんの恐なきに非ず、されば此に明に記し置くこそ、自他の本意に適ふべけれ、君はもと自由平等を尚べる米國に生れたる人にして、しかも天然の美音を集めて統一調和したる音楽といへる学芸を専修せる人なれば、人為の規則命令ほど君に惡感を与ふるものはあらざりしなるべし、然るに我國は之に異なり、人為の階級あり、規律あり或場合に於ては何人にも遵奉せしめざるべからざるの規則命令ありて、これが執行に任ずるもの學校に在りては學校長の職責なれば、仮令と恩師たりし人に対しても、これを曲ぐべからざるは勿論、余の性質として其強行を務めたるは、君の感情を害せしこと疑なし、こは公事の關係より起り来りしことにして、誠に是非なきことなりしが、互の私交上には少しも変わることも無かりしぞ幸いなる」⁽²⁴⁾。

Ⅲ・合同派遣計画とその背景

計画の内容

クラークがカーチスとジェンクスに宛てた手紙によれば、合同派遣計画の内容は、(1) 期間…3年、(2) 契約条件…年二千ドルを多数の宣教師派遣団体で負担する、(3) 目的…宗教音楽教育、多数の伝道中心地に音楽講習会を催す、というものであった。

文部省でした仕事と合同派遣計画との関係について、最上の結果を得るためには、文部省でした仕事を補足しなければならぬ⁽²⁵⁾、とメーソンが考えていることを、クラークはジェンクスに伝えている。そのようなメーソンはクラークには熱心な信者と映っている⁽²⁶⁾。

クラークへの返事で、カーチスはメーソンを雇用するミッションとして具体的にプレスビテリアン、バプティスト、メソジスト、アメリカン・ボードの名前を挙げている⁽²⁷⁾。また、メーソンが活躍できるアメリカン・ボードの伝道中心地として、四つの学校、五つのステーション、二十あるいはそれ以上の教会を数えている。このうち四つの学校とは、神戸ステーションの神戸女学校、大阪ステーションの梅花女学校、京都ステーションの同志社と同志社女学校のことだと思われる。

派遣計画の背景

しかし、それにしても、メーソンは宣教団とどのような接触があったのだろうか。宣教団となんら関係のない人物が、いきなり、多数の宣教団によって派遣される宣教師になる、そんなことが六十を過ぎた高齢の身で、真面目な話としてありえるだろうか。

ボストンにあるニューイングランド・コンセルヴァトリ・オヴ・ミュージック（以下NEコンセルヴァトリと略記する）のプレジデント、イーヴン・トゥルジェーは、かつて、メーソンの日本派遣を企画し、彼の日本での活動をバックアップした。日本から帰国したメーソンの歓迎会は明治十六年二月に開かれているが、その場所は、トゥルジェーのNEコンセルヴァトリであった⁽²⁸⁾。メーソンの日本での活動について、「全世界の宣教活動に新しいはずみを与えた」と、トゥルジェーは評価したのである⁽²⁹⁾。メーソンを日本に派遣したトゥルジェーの目的が、実は布教活動と深く

表 NE = ソセルヴァトリの常任理事一覧

伝道団	創立年	教派	役職
the Women's Board of Missions	1868	Congregationalists	president
the American Board of Commissioners for Foreign Missions	1810		Secretary
the American Baptist Missionary Union	1846		Secretary
the Women's Baptist Foreign Missionary Society			President
the Newton Theological Institute	1825		President
the Women's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church	1869		President
the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church	1819	Methodist Episcopal Church	Senior Secretary
			President
the New England Conservatory of Music	1867		President
the Boston University		Protestant Episcopal Church in the U.S.A.	Secretary
the Domestic and Foreign Missionary Society of the Protestant Episcopal Church in the U.S.A.	1820		Bishop
the Protestant Episcopal Church of the Diocese of Massachusetts			Secretary
the Home Mission Board of the Presbyterian Church in the United States of America		Presbyterian	Secretary
the Boston Branch of the Women's Union Missionary Society	(1861)	超教派	President
the American Missionary Association			District Secretary

関わっていたことが、端的に表明されている。

トウルジューが設立したNEコンセルヴァトリでは、メーソンの帰国より少し前、明治十四年に機構改革が行われた。³⁰キリスト教による建学の精神の永続化を図る、というのが目的であった。そのための具体的な措置として五十人のメンバーからなる理事会が設置された。この理事会について、明治十九年の便覧には、「理事会の永続的で大きな構成要素はこの国の偉大な宗教と伝道組織を代表している。これらの構成要素を理事会に導入した目的は、学院の運営が将来非宗教者の手に落ちることを防ぐためであり、音楽の伝道的理想を育てることである」と宣言してある。³¹実際、この宣言の通り、理事会のメンバーを見ると、多くの伝道団との緊密な連携が計られている。五十人の理事のうち、常任理事は十四人であり、彼らはいずれも伝道団とそれに関係の深い機関の役員である。³²これを教派別に示したのが表一である。

アメリカン・ボード (the American Board of Commissioners for Foreign Missions) の書記 (Secretary) はクラークに他ならないから、クラークはNEコンセルヴァトリの常任理事でもあった。こうして見ると、直接それを示す資料はないが、多数の教派が合同してメーソンを日本に派遣するという計画にトウルジューが無関係だとは考えにくい。むしろ、計画はトウルジューの発案であったと思われる。

IV. アメリカン・ボード単独派遣計画

ジェンクス宛書簡八三・一一・六

十一月六日付でクラークはジェンクスに重要な情報を伝えた。³³長老派に打診したところ、長老派は計画には参加し

ない、と言うのである。これで、計画がきつとだめになる、とクラークは心配している。手紙は、また、メーソンの給料をボードが単独で負担するように、というカーチスのメーソンを待望する意見を伝えた後、すでに採択された京都用資金計画で派遣する方がメーソンには得策なのではないかと、ボードの経理担当ワードの意見を伝えた。ここで問題が、教派合同派遣から、アメリカン・ボードによる単独派遣の可能性の検討に移っていくことになった。

ジェンクス書簡八四・一・七

まず、明治十七年一月七日付でジェンクスがクラークに、来る十二日の特別会議でメーソンの件が話し合われることを伝えるとともに、ミッションはメーソンの来日計画に好意的ではない、という自分の観測結果を報告した。³⁴

ゴードン書簡八四・一・一〇

特別会議の二日前、十日付のゴードンの手紙³⁵は、日本の教会音楽の酷い状態をメーソンが改善してくれることを期待するとともに、同志社の男性教師一人と同志社女学校と神戸女学校のそれぞれ女性教師一人分のサラリーをメーソンのサラリーに充てることを提案している。この案は、後でラーネットの反対にあうことになる。

これよりも重要なことは、ゴードンが追伸で、来日以前にメーソンに接触したことを明らかにしていることである。ゴードンが言っている六年前は、計算すると、明治十一年にあたる。大阪ステーションで活動したゴードンはこの時期、ちょうどアメリカに帰国中であつた。明治十一年は、メーソンの日本招聘が実現に向けて表面化した年で、翌年のはじめには文部省内部で決定をみた。

そういう時期にゴードンはメーソンに会っただけでなく、メーソンの仕事成功するためには、ミッションナリと協

力することが不可欠だ、と助言をしたらしい。「メーソンは日本の音楽に消すことの出来ない印象を残すことが出来た」、とゴードンが述べていることからわかるように、メーソンはゴードンの助言の通り実行したにちがいない。ゴードンから言えば、メーソンの成功に彼の助言が一役買っていたということである。

特別会議八四・一・一二

さて、ジュンクスの予告通り、大阪のオルチン宅で、特別会議が十二日に行われ、出席したのは、グリーン夫人、デイヴィス、ゴードン、ベリー、ペティー、オルチン、デフォレスト、ギューリック、テイラー、アッキンソン、ジュンクス、そして一四人のレディーたちであった。

午後の会議でデイヴィスによってメーソンに関する議題が提案された。議事録⁽³⁸⁾によれば、それは次のようなものであった。

「歌のサービスはあらゆる年齢層に対しても福音の強力な補助となる、そして今日ほどそうだったことはなかった、そして、日本での我々の事業の現段階においてこうしたサービスがうまく開始されることが重要である、我々は、Mr. Mason が喜んで来て、三年間この事業をしてくれると聞いている」⁽³⁹⁾。

この議題は次の決議によって採択された。

「我々は熱心にボードに対して、彼の活動を我々のミッションや特に学校との関わりで保証してくれることを要求する」。

この会議の様子はただちに、十四日付でオルチンによって、クラークに報告された⁽⁴⁰⁾。右記ゴードン書簡とおなじ長文のもので、いずれも伝道と音楽との関係、日本の音楽の現状について報告した、洋楽史にとって貴重なドキュメン

トになっている。

メーソンに関しては、簡単に言えば、大阪ステーションは特にメーソンの来日を歓迎する、というものであった。メーソンとの関係でオルチンはもう一つ重要なことを述べている。それは盲人の音楽教育である。つまり、当時、盲人はもっぱら音楽を職業としていた。しかし、彼らがいったんクリスチャンになると、それまでの自分たちの音楽を棄ててしまう。しかし、それでは彼らは家族を養うことができない。そこで、教会としては、彼らが新しい音楽で家族を養うことができるように教育する必要がある。そのような教育にメーソンが最適だというのがオルチンの意見であった。

ここで、メーソンが滞日中⁽⁴¹⁾、そして、日本を離れてからもずっと盲人の音楽教育に特に力を入れている様子が思い出される。メーソンは、明治十四年暮れに京都を訪問し、明けて正月三日に盲啞院を訪れている。十五年七月に休暇で日本を離れてから、メーソンはヨーロッパで訓盲院を視察した。⁽⁴²⁾十六年の一月に解雇を知ったメーソンは、せっかく盲人のために種々の計画をしていたのに、契約が継続されないとは、と残念がっている。⁽⁴³⁾同じく、四月にも伊沢に渡欧中は盲人の音楽教育にとくに関心を払ったと述べている。⁽⁴⁴⁾

メーソンは自分のシステムを日本の盲人に普及させる方法を模索していたようである。その目的は、まさに、オルチンが言ったように、キリスト教に改宗した盲人たちを自分たちの音楽の専門家として再教育することだったに違いない。

V. 計画挫折

ラーネッド書簡八四・一・二八

日本ミッション特別会議で承認されたにもかかわらず、メーソンの受け入れは一転して挫折する。それは、特別会議に出席していなかった京都のラーネッドの反対から始まった。会議からまだ間もない二十八日に、ラーネッドが、メーソンが来ることによって、京都と神戸の音楽教育の予算がカットされるのならメーソン派遣には反対である旨をクラークに伝えた。⁽⁴⁵⁾これは、先のワード案、「京都用資金計画で派遣する方がメーソンには得策なのではないか」という案、そしてゴードンの案、「同志社の男性教師一人と同志社女学校と神戸女学校の女性教師二人、計三人分のサラリーをメーソンのサラリーに充てる」という案に反対したものと思われる。大阪ではすでにオルチンがよい仕事をしているし、メーソンにそれだけ出資するなら、神戸と京都に一人ずつ音楽を教える宣教師を雇った方が得策である、というのがラーネッドの反対理由であった。

ちなみに、八十四年度アメリカン・ボード日本ミッションの予算を見ると、最高年俸額はアッキンソンとテーラーの千六百ドルである。⁽⁴⁶⁾ゴードンは千四百ドル、ラーネッドは千百ドル、オルチンは千ドルである。メーソンの予定年俸二千ドルは、同志社トレイニングスクールの二千五十ドルに匹敵し、同志社女学校五百五十ドルの約四倍、神戸女学校七百ドルの約三倍に相当する。独身婦人宣教師はすべて五百五十ドルであるから、もしもラーネッドの言うように、京都と神戸の音楽教育のために新たに二人独身婦人宣教師を雇用しても、千百ドルだから、メーソンの半分ですむ。

クラーク・カーチス往復書簡八四・二・一八一六・一九

ラーネッドの反対意見は、彼を信頼していたクラークの判断に強い影響を与えたようである。二月十八日に、クラ

ークは、カーチスに宛てて、ボードによるメーソンの派遣は絶望的であると伝えた。⁽⁴⁷⁾ クラークの筆跡は、ひどい走り書きの上、滲んでしまっているので、判読には非常な困難がともなうが、だいたい次のような内容である。メーソンは私的事業として来日する予定である。そして、それが唯一考えられることで、メーソンを自分たちのボードのエージェントとして雇う可能性は現在ほとんど無くなった。⁽⁴⁸⁾

クラークがここで言っている私的企画とは、おそらく、トゥルジェーを中心にした組織的派遣計画ではないという意味に解釈すべきかもしれない。あるいは、単に、ミッションの資金によらず、自己資金で渡日する計画を意味するのかもしれない。

カーチスは、二十七日付の返事で、メーソンが来てくれるのは助かるし嬉しい、できるなら、メーソンが自分たちのボードの雇いになって欲しいと未練を表明している。⁽⁴⁹⁾

六月三日になって、カーチスはさらに、クラークに、メーソンの来日計画の見込みについて、彼は教派合同でくるのか、それとも独立してくるのか問い合わせた。⁽⁵⁰⁾

十九日のクラークからの返事は、多数の宣教師派遣団体と一緒にあってメーソンを日本に派遣する計画に参加できない、⁽⁵¹⁾ とつれないものであった。メーソンは、オルガン製作所をスタートさせるつもりで、彼自身の個人的計画で日本へ行く予定か、あるいは既に行ったのではないか、という情報を寄せている。このとき、クラークがはじめて触れたメーソンのオルガン製作所設立計画は、すでに、八十三年四月二十二日の伊沢宛の手紙で触れられていたものである。⁽⁵²⁾

クラークは結局ラーネッドの意見を入れて、京都と神戸に音楽を教える独身婦人宣教師を一名ずつ雇う方針にしたことが、体調をくずしていたクラークに代わって書いたアルデンの十一月五日のジェンクス宛書簡から分かる。⁽⁵³⁾

VI・新島襄とメーソン

一年間の検討の末、結局十一月には、京都と神戸のための資金は、メーソンではなく、京都と神戸に一人ずつ独身婦人宣教師を雇うために使われることが決まった。京都と神戸の資金でメーソンを雇用するという大阪の宣教師の案は、京都のラーネッドの反対であえなく潰れてしまった。しかし、メーソンはアメリカン・ボードの決定を知らされていなかったのだろうか。彼は十二月になって伊沢に、アメリカの宣教師らと一緒に仕事をする希望をまだ持っている、計画は出来上がっており、一年以内に再来日するつもりだ、と伝えた。⁽⁵⁴⁾このことが、後に、新島との不幸な出会いを生む直接の原因となった。

こうして翌八十五年八月七日⁽⁵⁵⁾、メーソンはアメリカン・ボードの決議機関の議長であったハーディへの紹介を頼みに、メイン州ウエスト・ゴールズバラに新島を訪ねた。しかし、メーソンに会った新島の様子からは、メーソンが伊沢に説明したように、彼の来日計画がまとまっていたとは、とても考えられない。むしろ、逆に、アメリカン・ボードと日本ミッションの決定を知っていた新島にとっては、彼の計画は、もはや音楽病の老人の繰り言でしかなく、極めて迷惑な提案だったらしい。新島の目に映ったメーソンは、歳を取って頭のおかしくなった偏執狂そのものである。ともかく新島の紹介でメーソンに会ったハーディが何を言ったかは分からない。その後の経緯を見れば、メーソンの目論見はうまくいかなかったようである。アメリカン・ボードの機関紙「The Congregationalist」の九月十日号に、かつて日本にいたときの書簡が掲載された。「こうして、わたしは、長い間望んでいた仕事を成し遂げたのです。音楽の仕事と宣教の仕事の両方を」。メーソンはどのような思いでこの書簡をながめたであろうか。メーソンの日本に

対する断ちがたい思いは、十月十八日に伊沢に宛てた手紙の、⁶⁶「日本に関する私の計画について、二、三日中にお知らせします」という言葉を最後にとぎれる。

計画の壮麗さにくらべて、このように極めて悲惨に終わったメーソン派遣計画が持つ意味を最後にまとめてみたい。

Ⅶ・メーソン第二次派遣の意味

メーソン事件のもっとも重要な意義は、これによって、その前後の歴史がはっきりすることにある。前の歴史に関しては、この事件は、はからずも唱歌が何であつたかを明らかにしている。

一八七二年八月、トゥルジェーが日本公使から唱歌を導入するのに適当な人物の推薦を要請されたとき、彼は、日本への唱歌導入をキリスト教伝道との関係でとらえていたに違いなく、また、そのように日本公使に説明したのではない。その上で、メーソンに白羽の矢を立てたのであろう。日本公使も唱歌導入を日本のキリスト教化の方策の一環として考えたに違いない。

メーソンは来日以前に宣教師とコンタクトをとっていたのではないかという推測は、ゴードンの証言によって裏付けられた。ゴードンは、一八七二年に来日し、梅本町公会の初代仮牧師になり、高木玄眞らに洗礼を授けた人物である。メーソンと会った後、再び来日した彼は明治十二年から同志社で唱歌を教えた。⁶⁷十三年に来日したメーソンは、ゴードンの助言を受け入れ、宣教師によるそれまでの讚美歌教育の経験を踏まえ、宣教師の讚美歌伝道と連携をとったからこそ、わずかの期間に驚異的と言える成功を収めることができたのであった。

ゴードンを介して、メーソンの唱歌は、大阪の最も初期の讚美歌集、高木玄眞筆写本にまで繋がっていることにな

る。唱歌が讃美歌の一変種であったことは、これで動かしがたい事実になったと言っている。唱歌は、正に、メーソンを派遣したトゥルジャーの未完の日本音楽伝道計画の落とし子であった、と言わなければならない。

メーソン派遣問題以降の歴史に関して言うと、メーソンが果たせなかった計画、あるいは課題を、讃美歌教育は引き継ぐということになったと思われる。このことは、当の宣教師達にはつきり意識されていた。そのいい例が、いわばメーソンの代わりに神戸女学校に音楽部を創設したタレイであった。彼女は次のように証言した。西洋文明をそっくり身につけようとした日本人は、「西洋歌曲を教えるアメリカ人教師を呼び寄せることにし、それでルーサー・ホワイトニング・メーソン氏が日本に来て、そこで十年間、日本の音楽教皇でした。……もともと立場は違っていました。……日本の宣教師はメーソンの仕事の協力者になりました」⁵⁸。この証言に、自分の仕事はメーソンの仕事を引き継いだものだという、タレイの意識を読みとる事が出来る。

こうして見ると、唱歌導入の歴史に関して、幻の再来日計画を第二次派遣と呼ぶならば、文部省お雇い音楽教師としての来日は第一次派遣であったと言える。讃美歌と唱歌の歴史は、メーソンのこの二つの派遣によって一つの歴史として繋がっている。讃美歌の歴史から言えば、明治二年からはじまった讃美歌教育の発展⁵⁹にとって最も重要な事件が、メーソンの第一次派遣と幻の第二次派遣だったのである。

メーソンが新島を訪ねたとき、彼は若き日の回想録を執筆中であった。新島は過去を見、メーソンは未来を見ていたのではないか。日本の唱歌あるいは讃美歌の教育とオルガン製作のその後の歴史は、新島が拒絶したメーソンの計画をなぞるようにして進んでいった。

- (1) 伊沢修二「メーソン氏を弔ふ」(『同声会雑誌 第六号』一八九七) p. 41.
 - (2) "Of course, I have given up all hope of doing this under your government, but still hope to do so in connection with the American Missionaries who are your true friends." (原書簡はエドワーズ郷土館所蔵)。
 - (3) "The plans for my going to Japan are complete and hope to be in your country within a year."
 - (4) "Denominationally he was a Congregationalist, and belonged to a congregation in Boston." Address by the Rev. Mr. Laurence at the funeral of Professor Luther Whiting Mason. (Special Collections in Music, Hornbake Library, Room 3210, University of Maryland).
 - (5) 「新島襄全集三 書簡編一」(同朋舎 一九九二) pp. 356-58. 私の質問に、教示下さった本井康博氏に感謝した。
 - (6) 音楽図書館協議会の主催で一九九三年十月二十日から二十三日まで函館で行われたセミナー「洋楽史再考—幕末から明治のキリスト教音楽—」。
 - (7) N. G. Clark's letter to W. W. Curtis, 1883. 10. 27 (Unit 1 Reel 39 Vol 96, 246). なお、"Unit" は書簡を同人社大の学術情報センター所蔵のマイクロフィルムに目録表示したものである。以下のシラート録信の書簡についても同じ。
 - (8) "He thinks he can do a great work there for sacred music."
 - (9) 若山晴子「ウイリアム・ウイリス・カーティス師の生涯」(覆刻『讀美歌并楽譜』解説 一九九一) pp. 43-67. 若山晴子「米国伝道会宣教師文書」に関する様々な報告(二) 一來日宣教師の夫人たちの手紙—その(一) W・W・カーティス師の夫人たち」(『学院史料』一〇一、一九九三) pp. 28-57.
 - (10) "You are acquainted with Mr. Mason..."
 - (11) 拙著「唱歌と十字架」(音楽と文芸社 一九九三) pp. 315-17.
 - (12) "I have heard that some of the Organs sent your mission were received in a damaged condition. I wish to know whether the manufacturers were at fault in packing them, or what the trouble and its cause? [was] Whose make came in the best condition? In what condition did you receive the one given to your mission by the Mason & Hamlin Organ Co.?"
- Miss Gouldy has applied to Dr. Bush for an Organ, hoping to get it from the Philadelphia Branch of the Woman's

Board. The Woman's Board or their Branches do nothing of the kind unless recommended from the Secretaries. Such applications should be endorsed by the mission, and then sent to me, when, if approved, every effort will be made to carry out the request. Does the mission approve Miss Gouldy's request? If so, please inform me, and I will secure it if possible.

I think I can send one direct from San Francisco, either Mason & Hamlin or the Smith American Organ Co's. The Smith Am. Organ Co., I can get at half price; hence if equally desirable, should prefer to get the Smith's."

N. G. Clark's letter to Rev. O. H. Gulick, 1874. 10. 3 (Reel 25 Vol. 41, 315-316).

(13) 赤井勸「オルガンの文化史」(青弓社'一九九五) p. 30.

(14) 「日記 明治十四ヨリ至明治十四年十二月」(『京盲文書』³⁴) 京都府立盲学校所蔵。

(15) N. G. Clark's letter to DeWitt C. Jencks, 1883. 10. 31 (Unit 1 Reel 39 Vol. 96, 275-278).

(16) "...dropped from their service by the reduction of their force of teachers,..."

(17) W. W. Curtis' letter to N. G. Clark, 1883. 10. 31 (Roll 11, 578). シリーク宛書簡は同志社大学人文科学研究所蔵のメイ・クレンツの田録に示した。以下同様。

(18) "the Japanese Government made a mistake in making a change."

(19) 中村理平「洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—」(刀水書房'一九九〇) pp. 538-42.

(20) メーソンの「帰国申出では、二、三の疑問がないわけではなう」とメーソンの解雇に疑問を持つ山住正巳氏は、「財政上の理由があったとしても、メーソンを一方的に解雇してしまったことが、日本の音楽教育にとって有利であったかどうか疑問が起こつてくる」という。山住正巳「唱歌教育成立過程の研究」(東京大学出版会'一九六七) pp. 196-202.

(21) 東京芸術大学百年史編集委員会「東京芸術大学百年史東京音楽学校篇第一巻」(音楽之友社'一九八七) pp. 229-30.

(22) 同右' p. 231.

(23) 上沼八郎「伊沢修一と Luther Whiting Mason」(小稿—L. W. Mason) の書翰を中心として」(『東京女子体育大学紀要』五'一九七〇) pp. 181-82.

(24) 注(一)参照。

(25) "He feels that his former labors need to be supplemented in order to obtain the best results."

- (26) "Mr. Mason appears to be a devout Christian man,..."
- (27) "I don't know whether convention work would be a success or not. I have some doubt, but I suppose if under the combined employment of several societies he would have to work chiefly by that method. We should probably get almost nothing from him except in that way of serving Presbyterian, Baptist and Methodist as well as our Board."
- (28) "Return Reception to Professor Luther Whiting Mason, 1883. 2. 16." (Special Collections in Music, Hornbake Library, Room 3210, University of Maryland).
- (29) Manual of the New England conservatory of Music, 1886, p. 19.
- (30) Davis, Mrs. M. J. "The New England Conservatory of Music." Bay State Monthly. December (1884): 137.
- (31) "Article 5 of the By-Laws is important as showing how the Board of Trustees is constituted. As will be seen, a large and permanent element of the Board represents the great religious and missionary organizations of the country. The object of the introduction of this element into the Board is to prevent the institution forever from falling into the management of irreligious hands, and to foster the missionary idea of music." Manual of New England Conservatory of Music, 1886, p. 22.
- (32) Ibid. p. 24.
- (33) N. G. Clark's letter to DeWitt C. Jencks, 1883. 11. 6 (Unit 1 Reel 39 Vol 96, 327-328).
- (34) DeWitt C. Jencks' letter to N. G. Clark, 1884. 1. 7 (Roll 16, 112). ウシノ輔經君ニテ書ル
- (35) 補經君ニテ書ル
- (36) M. L. Gordin's letter to N. G. Clark, 1884. 1. 10 (Roll 14, 138).
- (37) "I then expressed to him the opinion that his work could not reach accomplish high and wide-spread results unless he was able to cooperate with the missionaries. With the wide-spread and ever wider spreading work of our mission."
- (38) "I believe he could make an ineffaceable impression on the music of Japan."
- (39) Minutes of a Special Meeting, 1884. 1. 12 (Roll 6, 6).

- (39) 吉田亮「資料紹介：アメリカン・ボード議事録、年会報告(4)——一八八〇—一八五年」(同志社大学人文科学研究第三研究班研究発表資料、一九九五)。
- (40) G. Allchin's letter to N. G. Clark, 1884. 1. 14 (Roll 9, 61).
- (41) "If I recollect rightly, you are one of the trustees of the Perkins Institute for the Blind. My object in writing you is to obtain specimens of printed music for the blind, also of all elementary instructions in music. They have an institution for the blind here on a small scale, not supported by the government. While I am here I desire to do what I can for them. I have as a pupil a blind man, who is the best performer and teacher of the Cota, their harp of thirteen strings, in Japan." Mason, "Mason's Letter to John S. Dwight, July 21, 1880" Dwight's Journal of Music, September 11 (1880): 151.
- (42) "I am very much interested in the education of the blind of your country and I think I can do something for them in music. I wish therefore to visit the Institution for the blind in Kioto as I understand there is such an Institution there." 「教師マーンン冬期休業中の旅行伺」(『全議書類明治十三年二月—十五年六月下巻』一五九)。
- (43) 「マーンンより伊沢宛ヨーロッパの手紙」(『音監往復書類 明治十六年下』三九丁(東京芸術大学百年史東京音楽学校編第一巻) p. 238-39)。
- (44) 「大田卿福國孝宛マーンン書簡、一八八三年一月一五日」(『音監開申書類』(東京芸術大学百年史東京音楽学校編第一巻) p. 239)。
- (45) "I gave much attention to what is being done for the blind, in music, especially as to methods of writing and reading." 「伊沢修二宛マーンン書簡、一八八三年四月二二日」(上伊那郷土館所蔵)。
- (46) D. W. Learned's letter to N. G. Clark, 1884. 1. 28 (Roll 16, 297).
- (47) 出(8) 21 匣。
- (48) N. G. Clark's letter to W. W. Curtis, 1884. 2. 18 (Unit 1 Reel 40 Vol 97, 467).
- (49) "Mr. Mason is planning to go (out) in a private enterprise, and it is perhaps, as well, (all) things (considered). Our Mission may be able to secure (his) services in various ways. The (Missions) were/was pleased with the idea of his coming. I wish we had (the) means to employ him as our agent exclusively, but there is little hope/

(to fix) of that at present.” 444 () 内は雑誌に440号誌 / の前後は1つと推定するが、難しさを表す。

(47) W. W. Curtis' letter to N. G. Clark, 1884.2.27 (Roll 11, 580).

(52) “Will he be supported as was talked of by the various missionary societies or work independently?” W. W. Curtis' letter to N. G. Clark, 1884.7.3 (Roll 11, 585).

(53) “I note one of your inquiries, which I will answer. I could not arrange for Mr. Mason's going to Japan to be supported by different missionary bodies. I learn he is to go, or has already gone, with a view to starting some organ manufactory, and going on his own private plans. just how I am unable to say.” N. G. Clark's letter to W. W. Curtis, 1884.7.19 (Unit 1 Reel 41 Vol 99, 462).

(52) “I go to Japan on a private company's account...” 「由良修三宛キーンン書簡一八八三年四月十三日」(上伊那郷土館所蔵) 上段八段「由良修三宛キーンン書簡」下段「『東京女子体育大学記録』5' 一九二〇」p. 182.

(53) “the requests for the appointment of single ladies, specially for teaching vocal and instrumental music for Kioto and for Kobe, were placed in the hands of the Home Sec'y to make inquiries, and if possible, to secure such ladies, it being understood, however, by the Committee that the request means that they shall be earnest Christian women devoted to evangelistic work, including the teaching of music.” E. K. Alden's letter to Jencks, 1884.11.5 (Reel 41 vol. 100, 506-508).

(54) “Of course, I have given up all hope of doing this under your government, but still hope to do so in connection with the American Missionaries who are your true friends. The plans for my going to Japan are complete and hope to be in your country within a year.” 「伊沢修三宛キーンン書簡' 一八八四年十二月五日」(上伊那郷土館所蔵) 「東京芸術大学百年史東京音楽学校編第一巻」pp. 241-242.

(55) 「新島襄全集」(同朋舎' 一九九二) p. 349.

(56) “I will write to you in a few days as to my projects as to Japan.” 「伊沢修三宛キーンン書簡一八八五年一〇月一八日」(上伊那郷土館所蔵)。

(57) 「同志社視察ノ記」(京都府立総合資料館所蔵「徳重文書」所収)。

(58) “Western Music in Japan: Interview with Miss Elizabeth Torrey.” Music vol. 15 (1898): 49.

- (23) “My class of girls improve & I hope will become christian women. They have learned a part of the fifth chap. of Mathus in English and Japanese, the Lords prayer, & many hymns. I think they would learn to sing well with a proper instruction.” Mrs. J. C. Hepburn’s letter, 1869. 6. 29, Records of U. S. Presbyterian Mission, Japan Letters 1869-1873 (Japan vol. 2).